

I 私が「数」に興味を覚えたのは、確か小学校2年生の頃だったと思う。

当時は戦後間もない頃で、売っている雑誌も数えるほどだった。そのうちの一つ、野球の雑誌があった。誰かがそれを買って来た。いつも読んで聞かせる役の私は、ぐるりととり囲んだ学級仲間たちに、アクセントたっぷりにその味わいを伝えようと、毎回工夫を凝らしたものだだった。

運動神経が駄目だったが、必死に自分で石コロをボロ切れで包んで作ったボールを持って行き、チームに加えて貰った。

しかし、いざ試合をやり出すと、私の落球、三振、エラー等でいつも負けてしまい、もう参加することか自体が悪であるかのように思え、断念してしまった。

この頃から私にとってそれは、観念上のものとなってしまっていたのである。

当時、全盛をきわめんとしていた巨人に正面から対抗して、あっぱれな勝ちぶりをしていたのが阪神タイガースであった。今でも当時の打順が脳裏から離れない。

別当、本堂、土井垣、呉、藤村（兄）……もう喜寿も終らんとしているが、当時の記事が生々しく蘇り、七〇年経った今でも、やはり阪神タイガースファンである事に変わりはない。バッキーがピッチャーで優勝した頃、阪神グッズを一通り揃えたりした。しかし、その後は優勝もしないらしく、もし、優勝した暁には、遠路遥遥、甲子園球場に駆けつけて乱痴気騒ぎの一員となり果てたいと思う。だが現実には、TV、ラジオ、スポーツ新聞とはまったく無関係な毎日であり、監督や選手の名前すらまったく知らない。阪神ばかりでなく、すべてのチームがそうだ。せいぜいがイチロー位である。それでもやはり阪神びいきだ。別当、本堂、土井垣、呉、藤村（兄）……若林、藤村（弟）としての。

何よりも、圧倒的に強大な敵に対して、少しも怯まず正々堂々と戦を挑む姿は、私の人生の長い様々な局面において、何度勇気づけられたか知れない。なかでも、ホームラン46号までかっ飛ばした藤村富美男の豪快ぶ

りは大きかった。

しかし、不可解な現象がある。当時の記憶を辿れば、ライバルであるはずの巨人の「川上の赤バット」も鮮やかに思い出される。ここぞと思われる局面において、私の頭の中では、快音を轟かせて「弾丸ライナー」をブツ放し得点を重ねている。その記事に、阪神ファンでありながらも、尊敬せざるを得なかった。

こんなわけで、彼の背番号であった「16」は、当時の僕の守護神であった。なぜそうにまで入れ替ったのか、未だもって不可解である。

II やがて高校を卒業し進路を決めるにあたって、東北大に受かる自信があったが、様々な事情で進学を諦め、一年間、高校の美術部で僕にみっちり漫画を手ほどきしてくれた故「石森章太郎」さんに憧れ、上京して新聞販売店に入った。石森さんから、口癖のように「一般教養は、売れないうちにマスターしないと駄目だ。売れっ子になってからでは時間がない。だから、売れっ子になった時点での教養の位置が、同時にその漫画作品の質を決めるんだ。頑張りな。人生がかかっているんだから」と繰り返し言っていた言葉が、今更のように思い出される。

振り返ってみれば中学時代までは理系で通し、高校進学してからはすっかり文系の頭になり芥川龍之介、永井荷風などなどに入り浸っており、数学などは70点レベルであった。

しかし、新聞屋の仕事の空き時間に区立図書館に入り浸り、「一般教養を」ということで、分っても分らなくてもとにかく読み耽った。そのなかで、大数学者ヒルベルトの「論理は計算で解ける」の一言で、私の向かうべきは漫画ではなく数学であることを知り、私は東京理科大学のI部数学科を受け、即合格した。

だが、芥川龍之介、永井荷風でいっぱいだった私は一般の理科大生とは違っていた。ほとんどは数学だけは大好きで入ってきた学生だったが、私は入試での成績は数学は30点ぐらいで、英語と生物が満点近かったので入学できたのであった。数学嫌いの私にとって情勢は真向いだった。

入るなり、図書館へ行ってヒルベルトの本を借りて読み耽った。その日のうちに半分位の所で、「 $1 + 1 = 10$ 」と出て来た。これは2進数の計算である。当時の大学には論理学専攻の分野は開かれていなかった。教わったことを丸暗記していい成績をとり、いい就職先にありつこう等という道ではなく、ただ「数学の本質は一体何なのか、数学が面白いのは何故か、

私は数学にそもそも向いているのか」という、一般教養の広さの一部としての数学だった。苦学もあり、一般学生とのズレもあり、漫画の延長である江戸落語の世界に芸名を持ち、座布団にも度々登ったりし、他方では神保町で、頻りと「論理学」の本を買い漁る日々が続いた。しかし、教育課程のタイムリミットがあり「抽象代数学」にすべてをかけようという気になり、退路を経た。何しろ、数学だけは何年も合格していなかったなかの必死の大冒険だった。合格だった。しかも自信の「優」である。以来、人が変わったように数学に打ち込み卒業した。

Ⅲ 抽象代数学の入門に「群論」がある。ここで出てきた数は、もはや「16」ではなかったのである。16に全てを賭けて来た私にとって、それは大きなショックであった。それは

- ①まずもって群論に登場した定理に「2次元のあらゆる図形のシンメトリーのパターンが17種類しかない」という冷厳な事実であった。
- ②次いで、物理学で「素粒子の数は全部で17種類に分類される」という冷厳な事実である。こうなると、何かを考えざるを得ない。
- ③これに続いて知ったのは17はフェルマー数の第三番目の数である。フェルマー数は正n角形の作図の問題と密接な関係がある。
- ④p、qを異なる素数としたとき、 $p^q - 1$ と $q^p - 1$ が40000以下の公約数(1を除く)をもつのは、 $p = \underline{17}$ 、 $q = 3313$ の場合だけが知られている。このときの公約数は112643である。
その他、17に関する数学上の項目が多数あり。
- ⑤文学も趣味のひとつであった私は、俳句の
五音+七音+五音
の17音の世界を、すぐさま思い出した。日本にあって17とは美の基準である。
- ⑥次いで思い出したのは
聖徳太子の「十七条憲法」
- ⑦更に、仏教では
「十七回忌」
というのがある。イスラム教のシーア派では、17は休日に関連した数である。
- ⑧こうなってくると誰にも押し止めることはできない。見つけた順番に列

記してゆこう。

ベートーベンのピアノソナタ第17番は有名な「テンペスト」である。

- ⑨ロシア革命は、1917年に行われた。
- ⑩かつて、北ベトナムと南ベトナムとの軍事境界線は、北緯17度線であった。
- ⑪黒鉛筆の芯の硬さは17種類である。
- ⑫男子プロボクシングは、全17階級である。
- ⑬「17年蟬」はアメリカ合衆国東部に生息し、17年を周期として発生する。これは、天敵に捕食されるのを嫌って進化したもので、3種類存在していることが確認されている。
- ⑭ラテン文化圏において17とは忌みの日である。
- ⑮「L I O N」を逆さの方向から見れば、「NO17」と見える。「L I O N」を商標登録している。
- ⑯Jリーグ「サガン鳥栖」の永久欠番は17である。
- ⑰娘になる一年前であることに絡めて、17に関する題名の小説、漫画、映画、アニメ、歌、ゲーム……、等、多数存在する。

⋮

以下、挙げればキリがないが、区切りをつけた。

IV 以上の説明からもお分かりのように、現れ方は多種多様であり16の比ではない。

結論を述べよう。私の単なる憶測なのだが、「将来いつの日にか、「17」を新たな基数とする数学が出現するのではあるまいか」という予感がしてならない。私はもう齢だ。単に仄めかすに止めて、後生に道をゆずろう。